

香川県におけるモモジロコウモリについて

森井 隆三・新名 進・川原 省吾

香川県立 香川高等学校

On *Myotis macrodactylus* (TEMMINCK) found in Kagawa Prefecture, Japan

Ryuzo MORII, Susumu SHINMYO and Shogo KAWAHARA

香川県における翼手目の研究は、石川 (1954)、岡田 (1955)、小野・植松 (1962) によってなされたが、*Myotis macrodactylus* (TEMMINCK) モモジロコウモリの記載はない。1968年5月に国立科学博物館の吉行瑞子氏から、四国の *My. macrodactylus* の正確な記録がないのでまとめるように要請を受けた。そこで香川県における筆者のこれまでの調査から *My. macrodactylus* の生態的な側面を筆者が、形態的な面については吉行氏が調査することとし、*My. macrodactylus* 20頭を国立科学博物館に送った。ここでは、この調査の生態的な一面を報告する。

My. macrodactylus の報告は1965年11月に筆者が屋島洞窟で1頭捕獲したのが最初のものである。筆者は1963年から香川県、特に屋島洞窟を中心にコウモリについて調査してきた。その他県下の洞窟としては女木洞窟、神懸洞窟、豊島洞窟と観音寺五郷溪公園の水門等をみてきたが、*My. macrodactylus* の colony はこれまでに屋島洞窟でのみ観察された。

1965年以降の *My. macrodactylus* の観察例は以下のようなものである。1966年6月8日には *Miniopterus schreibersi fuliginosus* (HODGSON) ニホンユビナガコウモリと同じ場所で両種あわせて約1000頭が共存しており、*My. macrodactylus* 39頭を捕獲 (♀38♂1)。仔を体にくっつけて飛翔している♀もいた。仔の数は捕獲したものではすべて1頭であった。1967年6月25日にも多数共存しており、この時には仔は相当成長して、親が飛び去った後の天井に100頭前後の colony が観察された。仔はまだ飛ぶことはできないが目は開き、毛ははえそろうていた。1968年4月16日に屋島洞窟で♀1頭、同月善通寺市内で♂1頭を捕獲、また屋島洞窟で6月3日には *Mi. schreibersi fuliginosus* とあわせて100頭前後観察、うち *My. macrodactylus* 6頭 (♀5, ♂1)、仔2頭捕獲、6月23日には *My. macrodactylus* 親 (♀27♂6)、仔 (♀2♂1) を捕獲。捕獲された1部を国立科学博

物館に送ったこのように6月には非常に多くの *My. macrodactylus* が観察され、それ以後同じ洞窟からは姿を消し、約500m離れた洞窟で1968年8月24日多数個体の colony が発見された。冬眠前の11月になって、再び6月にいた洞窟で少数観察されるといったように、時期によって住み場所を変えている。この時期が幼仔の育成の時期にあたるのかも知れない。6月にはるに比較して♀の割合がいことや、♀多が仔をだしている点からこの時期が *My. macrodactylus* の出産期であろうと思われる。出産期に♀の割合が多いのは *Mi. schreibersi fuliginosus*, *Pipistrellus abramus* (TEMMINCK) アブラコウモリにおいても観察されている。

屋島洞窟では上記のように *My. macrodactylus* と *Mi. schreibersi fuliginosus* との共存 colony が観察できるが、同洞窟内の他の種である *Rhinolophus ferrumequinum nippon* TEMMINCK キクガシラコウモリ、*R. cornutus cornutus* TEMMINCK コキクガシラコウモリ等の混合 colony は今までに観察されなかった。しかし山口県の秋芳洞 (庫本正氏による) 長岡市の狸々洞 (吉行瑞子氏による) では、これらとの混合 colony が観察されている。ちなみに科名を示すと *My. macrodactylus* と *Mi. schreibersi fuliginosus* は VESPERTILIONIDAE (ヒナコウモリ科) に属し、*R. ferrumequinum nippon* と *R. cornutus cornutus* は RHINOLOPHIDAE (キクガシラコウモリ科) に属する。これらのことから科にまたがった混合 colony を認めるか否かが問題となってくるが、今後の研究を待たねばならない。

最後に調査に協力いただいた香川高等学校生物部の諸君に深謝する。

文献 1) 石川重治郎 (1954) 高知女子大紀要 3:34~35, 2) 森井隆三 (1967) 香川生物 3:21~23, 3) 岡田康稔 (1955) 小豆島の自然 14~15, 4) 小野嘉明・植松辰美 (1962) 観光屋島 45~48, 5) 内田照章 (1966) 哺乳類科学 11:5~23.